

お弁当らいてうの会ニュース

新しいらいてう像のよびかけに応えて

第14回総会にあたって

平塚らいてうの会会長 米田佐代子

東日本大震災と原発事故の「3・11」から2年、震災・原発の被災者は故郷に帰れないままなのに原発推進をいう政府は、人間が生きていくことをどう思っているのでしょうか。最近では「武器輸出三原則」に明記されていた「紛争助長回避」を削除、戦争している国にも武器輸出を認めるといいます。日本から送り出された武器が直接戦争に使われる―「いのち」がこれほどないがしろにされる政治に、わたしたちは絶望にも似た怒りを感じています。

でも、愚痴は言いますまい。らいてうは日本が再軍備へと踏み出したときも、「わたくしは失望しない」と書き、冷戦下にも「敵は（どの国でもなく）ただ戦争だけ」と訴えました。らいてうの言う「ほんとうの平和」とは、憲法九条が明記する「非武装・非交戦」の世界です。改憲派は「交戦権の否定は国家主権の放棄」と大合唱していますが、らいてうは「戦争する権利」を「国家主権」とは考えませんでした。

「3・11」の経験は、「核の安全な平和利用」

などあり得ないこと、今沈黙したらだれのいのちも守れないことを、教えてくれました。「いのちを生む性」としての女性が立ち上がって「いのちの平和」を守ろう、というのがらいてうの平和思想だったのです。

けれどもらいてうのころざしは、没後42年の今もまだ知られていません。2016年はらいてう生誕130年・らいてうの家開館10周年・NP O設立15周年です。5月の総会では、この節目をめざしどう活動するか、また新しく発見された資料を生かした研究を深め、らいてうが「現在（いま）によびかけるメッセージ」をどう広げていくかを話し合います。すべてのいのちが生かされる「希望の世界」をわたしたちの手でつくりだすために――。

「らいてうの家」オープンと、らいてう忌

今年の「らいてう忌」は、「らいてうの家」へ『青鞥』原本見学の旅です。前回お知らせした『青鞥』原本（50冊）を4月27日（土）から5月27日（月）まで、「らいてうの家」で公開展示するのに合わせてツアーです。

「らいてうの家」は、4月27日（土）から11月4日まで土日オープン、今年も4月27日から5月6日まで平日も開館、米田館長が原則として

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

全期間待機してみなさまをお迎えします。（必ず事前にご連絡を）。
TEL・FAX 0268-74-1385。

2013年 りいてう忌ツアー

らいてうの家と『青鞥』原本を訪ねる旅

日時 5月26日（日）長野新幹線・上田駅温泉口集合
11時発バスであずまや高原へ。着地後昼食
（お弁当を用意します）。

お話*「発見された『青鞥』原本とその秘密」

米田佐代子

*「らいてうと消費組合『我等の家』」

折井美耶子

*1月放送のNHK番組にも触れて

「らいてうと『現在』」を考える話し合いを予定

●宿泊はあずまや高原ホテルで夕食交流会

5月27日（月）

*「らいてうの家」・「庭」をゆっくり見学。

「薬草園」、「らいてうの森」もご案内。

*13時発のホテルバスで上田駅へ解散

お急ぎの方は10時発のホテルバスあり。

・日帰り参加もできます。

参加費1万5千円（宿泊・弁当・入館寄付・資料代等）

日帰り4千5百円（ホテルバス実費、弁当以下同じ）

*上田駅までの往復交通費は各自負担。

●お申込み、問い合わせは「平塚らいてうの会」へ

FAX 03-3818-8626

●連休中の問い合わせは

TEL&FAX 0268-74-1385

冬の信濃を満喫

スノーシューと信濃の歴史を訪ねる



この冬一番の寒さとなった2月17日、国分寺駅に20人の仲間が集まりました。そば処「くろつぽ」で薫り高いおそばを味わった後、尾沢木彫美術館（写真）を訪ねました。70年前に建てられた新潟県東頸城郡の古民家を35年前に移築したという建物は、九間物の横柱をはじめとしてブナ、ケヤキ、杉などの部材が見事で建物そのものが作品であるようでした。山本鼎が北欧やソ連の農民美術に心を打たれ大正8年に始められ、今も15人ほどで木彫作品を作り続けているそうです。展示された作品の木を見極めた手仕事の見事さに感動。次に信濃国分資料館の見学と丁寧な説明の後、史跡公園となっている国分寺の保存の跡を見学。僧寺と尼僧寺とが、40メートルしか離れていない配置の特殊さなどよくわかり、遺跡保存の工夫と大変さなども説明されました。今年は、4月28日から5

月5日まで12年に1度の信濃国分寺本尊秘仏の薬師如来の御開帳に当たると、その時にまたゆつくり訪ねてみたいと思いました。

翌日は、細かな雪が降り積もる中13人が西牧さんのご案内で新雪の森をゆつくりと楽しみました。ふんわりと雪をまとった森の美しさ、野兔の足跡を読み取り、木の不思議を学び、新雪のアイスマルクを味わって雪見の露天風呂を堪能しました。今年は、夏の森で溪流遊びをとの提案もあり再会を楽しみに散会しました。（三留 弥生）

2013年度 らいてうの家・企画展示

「消費組合 我等の家」

協同自治の社会を

今年度の企画展示パネルは、昨年の国連による「国際協同組合年」を受けて、らいてうが昭和初期実践した「消費組合 我等の家」の活動を中心に行いました。

那須や佐久山など自然のなかでの静養と子育ての時期を経て、1923年帰京したらいてうは千駄ヶ谷で関東大震災に出会いました。震災後の混



乱、そして救済活動などにも参加し、そのなかで相互扶助の精神を痛感するようになり、そしてクロポトキンの「相互扶助論」を熱心に

読み、続く昭和恐慌のなかで、平和的に実践的に社会を変革し協同自治の社会をめざす消費組合（現在の生活協同組合）活動を開始します。

居住地成城で「消費組合我等の家」を創設し、戦争経済で統制が強化され活動ができなくなるまで約11年間続きました。産直や不用品交換会など、今日の生協で行われている活動の原型がほとんど行われていますし、当時ならではの「女中さん」の夜学もありました。

協同組合の発祥の地であるイギリスの「ロッチデール先駆者博物館」に保存されている訪問者名簿には、明治五年に訪問した日本人二人の名前があり、珍しいその写真も展示してあります。

第14回通常総会のご案内

日時 5月11日（土）午後1時半開会

場所 東京・全労連会館会議室3F

議題 ①12年度事業報告と決算報告

②13年度事業計画と予算

③役員選出

「青鞥」原本内覧会



既報のとおり、「青鞥」原本がそろったことで1月9日、東京でマスコミ向けに「内覧会」を行いました。

マスコミほか、関係者が多勢見学に訪れました。

らいてう講座ひらく

太田治子さんと語ろう

—愛・平和・文化・人間—



敬愛されたお母さんのこと、文学や社会の動きなど、縦横にお話された太田治子さんでした。

から話されました。たとえば社会人になった治子さんに、「コートを買いなさい」と貧しい中で蓄えた大金を渡され、治子さんはまるまるそのお金で買ったコートを30年も着続けたお話を前奏に、縦横にのびのびと、身の回りに起きていることから、過去にさかのぼりまた未来に思いを馳せて、私たちの胸に「現代」の日本のおかしさ、危うさについて問いかけられました。

太田さんはいま明治の文豪、ロシア文学の翻訳家として知られる二葉亭四迷について研究、執筆中とのことで、そのため四迷が滞在していたロシアに旅をされたそうです。今のロシアは金持ちと貧乏人がくっきりと分かれた国になっていること、女性の物乞いもたくさんいたそうです。そのなかで太田さんが強く印象されたのは、その女性たちが実に堂々と自信に満ちて生きていることでした。

太田さんは、いま日本は東日本の災害復興、原発、他国との領土問題など、たくさんの問題を抱えています。何をしなければいけないか、最も考えなければならぬときに、安倍首相は憲法改悪まで言い出している。ロシアも中国も日本に戦争を仕掛けてくるなど絶対ありません。問題は日本のありかたこそが問われていること。とりわけ私たち女性が堂々と胸をはって「人間として生きること」と、「青鞥」にもふれ、静かに、しかしきつぱりと締めくくられました。

太田治子さんはまさに「らいてうのころざしを継ぐ人」、今期の講座は、新たなみので来期に向かうことができました。

(木村 康子)

NHKで「らいてうと市川房枝」を放送
たくさんの反響寄せられる

1月27日、NHK（Eテレ）「日本人は何を考えてきたのか」昭和編シリーズ（全4回）でらいてうが取り上げられ、案内人の田中優子さんともにも米田館長や奥村直史さんも出演、らいてうの家も紹介されました。内容は戦時下の知識人たちが戦争の時代をどう生きたかを問うもので、戦争政策に抵抗できなかった二人が、戦後二度と戦争させないと決意、平和憲法を守ろうとたたかい続けた姿を描き、好評でした。

ただ時間の制約もあって、らいてうが「このまま東京にいたら戦争協力を拒めなくなる」と開戦後間もない1942年春茨城県に疎開した事実などがカットされた点には疑問も寄せられました。この点は近く刊行の「紀要」6号でも取り上げる予定なので、ぜひご覧ください。

『紀要』6号 今年も刊行へ

財政難と人手不足で難航していますが、夏までには出したいと奮闘中です。内容は「還ってきた『青鞥』原本」（米田）、「資料に見るらいてうの戦前から戦後へ」（仮題）、「折井・米田」、特別寄稿「戦時下のらいてう像」（仮題）（奥村直史）など。資料多数を収録。予価700円。

会費納入のお願い

今年度総会は5月11日です。会費未納の方は、至急納入下さるようお願い致します。

「2012年度らいてう講座」に作家の太田治子さんをお迎えしました。

太田治子さんはNHKのテレビ番組「日曜美術館」の司会アシスタントをつとめられていました。豊かな感性と暖かなまなざし、ユニークなお話ぶりが印象にあつて、らいてうさんのころざしを継ぐ会として、いまこそ考えあいたい、「愛・平和・文化・人間」という漠としたテーマでお話をお願いしたのでした。

太田治子さんの父はかの有名な太宰治ですが、母、太田静子さんは未婚の母として、自力で治子さんを育てました。そんなお母さんを治子さんはこよなく敬愛され、在りし日の静子さんの生き方



「思うことを言い合った」 らいてうと一枝

—海藤隆吉さんに聴く

『平塚らいてうの会紀要』5号(2012年刊)に「祖母・富本一枝」を書いてくださったのは、一枝の孫にあたる海藤隆吉さんです。陶芸家の祖父・富本憲吉についてはすでに著書もあります。『青鞥』創刊100周年をきっかけに執筆していただくことができました。

富本一枝については、最年少青鞥社員としての尾竹紅吉時代は有名ですが、戦後1966年に亡くなるまでどんなふうに自分自身の人生を生きたかという実像はあまり知られていません。実は戦後らいてうが平和運動一筋の道を歩き始めたとき、らいてうを支えたのはかつて「大きな赤ん坊」といわれた年下の一枝でした。戦前、治安維持法

違反で逮捕されたこともある一枝は、戦後いち早く民主的な運動に参加、らいてうはその一枝を深く信頼してきたのです。最近らいてうの遺品の中から、雑誌『草の実』で富本一枝の自宅にらいて

うを招いて話を聞いた時の記事(コピー)が出てきました。(1961年11月号)。らいてうは当時大國の核実験をめぐって議論沸騰していた原水爆禁止運動について、対立を乗り越え「広い層の人々を含めていけるように」と話し、一枝は「あなたはこのごろ価値判断が正確になりましたよ」といったそうです。記事には「思ったことをはっきり言い合える」二人に感動、とありました。

この記事を持って、「薊の花」で富本一枝評伝の先鞭をつけた折井美耶子さんとともに、海藤さんのご自宅を訪問しました。海藤さんは「この写真には確かに祖師谷の富本家の居間ですね。記事は祖母の雰囲気そのものです。祖母は何でも率直に話す人でした。平塚さんのことを大好きだったから言えたのですよ」とおっしゃいました。この記事でも一枝は、らいてうを「樹木が長い間自然の力に鍛えられてみごとな風姿を創り出すうつくしさ」と語っています。

この日は、海藤さんから最近新発見された憲吉・一枝夫妻と幼い子どもたちの日常を撮った写真多数を見せていただき、また戦前、一枝が読売新聞に連載したエッセイのコピーも頂戴しました。大正から昭和にかけてのおびただしい家族写真はそれだけでも貴重ですが、一枝が子どもをいとおしく思い、大切にしていた様子がしみじみと伝わってきます。

新しい一枝像が書かれる日を待ち望む思いでした。

※写真は貴重な資料を見る海藤さん(左)と折井さん

【事務局日誌】

- 1月9日 『青鞥』原本内覧会(於東京ウイメンズプラザ)
- 1月18日 第4回常任理事会
- 1月25日 第5回理事会開催
- 1月29・31日 らいてう資料整理作業
- 2月6日 らいてう資料整理作業
- 2月15日 13年度「家」展示パネル製作打合せ
- 2月17・18日 紀要第6号編集委員会
- 2月17・18日 スノーシューと信濃の歴史を訪ねる旅
- 2月21日 「会」の将来を考えるプロジェクト会議
- 2月22日 「家」拡大運営委員会(於上田市民プラザゆう)
- 3月4・6日 らいてう資料整理作業
- 3月9日 らいてう講座 講師太田治子さん(於東京ウイメンズプラザ)
- 3月14日 「坂本福子弁護士を偲びお別れをする会」に出席
- 3月15日 第5回常任理事会
- 3月22日 第6回理事会開催

〈訃報〉 謹んでご冥福をお祈りいたします。

- 坂本福子さん 1月12日80歳で逝去されました。NPO取得やまた奥村家より上田市の土地をご寄附いただくときにお力添えをいただきました。
- 高野悦子さん 2月9日83歳で逝去されました。平塚らいてうの記録映画の製作に尽力ください。また2008年「らいてう忌」では「私と映画とらいてうさん」の講演をいただきました。